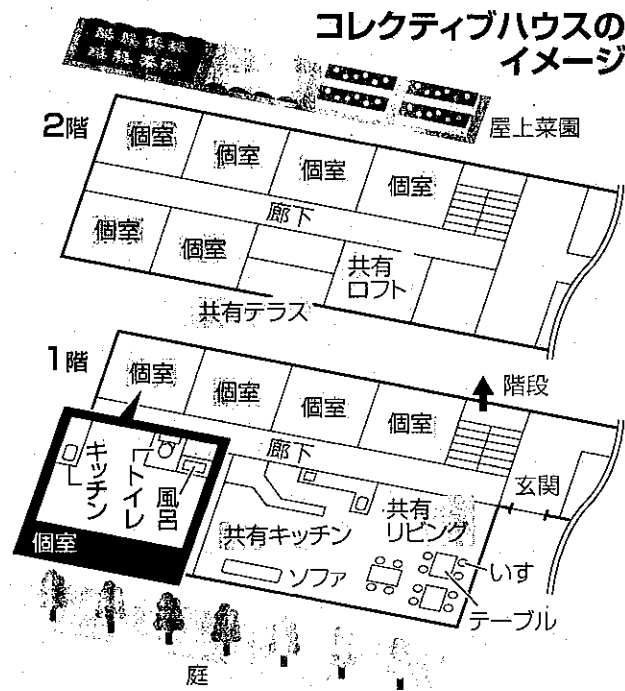


婚難の中で

コレクティブハウス
同じ屋根の下で

① 若い世代との縁刺激に

目の前に海が広がるカフェで、小学生の男の子がほほえんでいる。川崎千恵子(こが)がスマートフォンに保存している写真だ。「デートした時に撮ったの」と照れくさそうに笑う。孫でも親戚でもない。「ごちそうかと言



どが暮らす。コレクティブハウスは、居住者が生活の一部を共有しながら関わり合って暮らす集合住宅。一九三〇年代に北欧で始まったスタイルだ。

聖蹟は二階建てで、各住戸の玄関が内廊下に面している。ワ

ンルームからLDKまで、家賃は六万〜十三万円。大きな共有リビングとキッチンがあり、居住者は自由に使う。共有スペースがある住宅は、シェアハウスが知られる。個室はあるが、台所や浴室は共有するのが一般的だ。だがコレクティブハウスは自室にも台所や浴室があり独立して生活ができる点と、居住者が自主運営している点で大きく違う。

千恵子は多様な世代の人と関われるところが気に入って、昨年七月に入居した。写真の男の子は仲良くなった住人だ。「私は天涯孤独の身になったが、ここでの暮らしは広がりが出て刺激をもらえる」

手先が器用な父と、姉妹と間違われるほど仲良かった母の一人っ子。高校卒業後、同級生の女性の多くが就職した。「良

婚難の中で

コレクティブハウス
同じ屋根の下で

② 一人だけど独りじゃない

服飾パタンナーとして働いていた川崎千恵子(こが)が五十年代後半の時、仕事中に電話が鳴った。八十歳を超え、歩くのが難しくなった父を介助していたヘルパーからだった。「家に着いたら...お父さまが亡くなって



もできない。これまでに感じたことのない不安がよぎった。幸い大事には至らなかったが、隣の家でさえ遠く感じ、これから暮らしを考えるようになった。「近所は顔見知りだけど、物理的に離れているのは不安。長屋のように、隣とつながっている住まいがいい」。六十年以上住んだ家を離れる決心をした。

自分に合う暮らしを求め何度か引越した。高齢者限定の集合住宅にも住んだが、何かが物足りない。「私はいろいろな世代の人と関わって暮らしたい」。たどり着いたのがコレクティブハウス聖蹟だった。

子どもと接する機会は多くなかったが、共有リビングで遊んでいた小学六年の矢田「真(まこと)」に声を掛けてみた。「船のペーパークラフトを作ってみない?」。すぐに「うん」と元気な声が返ってきた。交流が始まり、横浜市の海洋博物館のイベ

ントに二人で出掛けないかと誘った。

「考えてみたら、子どもと一緒に歩いたこともない。少し不安もあった」。当日、一真との会話は途切れることなく、カフェでランチをしたり、海沿いを散策したりした。「とても楽しかった。孫と出掛けた気分だった」

コレクティブハウスは住人が自主運営しており、共有部分の掃除や、庭の手入れなどは自分たちでやる。大変なこともあるが、思っていた以上の暮らしができていると実感する。「一人と緩くつながっていられて、関わりたいときは関わらなくてもいい。飛び込んでみて本当に良かった」

婚難の中で

コレクティブハウス
同じ屋根の下で

③ 小さな社会で助け合い

「少し卵が足りないかな...」。コレクティブハウス聖蹟の午後六時すぎ。三人の女性が夕食作りをしていた。豚肉と白菜のトマト煮、カボチャサラダ、ピクルス、プリン。大人と子ども合わせて二十二分。大橋佳奈(よしの)は「量が難しい。七年たっても作り過ぎちゃう」と笑った。



聖蹟では月に二十日ほど住人が共同で夕食を囲む。「モンミール」と呼び、大人が交代で当番に入り、メニュー決めから買い出し、調理までを担当す

じ時間に食べ始める必要もない。午後七時ごろに出来上がるため、徐々に居住者が共有リビングに集まり、思い思いの席に座って夕食が始まる。

佳奈は新婚当初から入居し、今は二人の子もがいる。この日の調理中は、子どもを隣の人に見てもらった。「最初は慣れないこともあったが、今はありがたい環境だと思う。普通なら、子どもの泣き声ひとつでも気を使うが、ここでは皆、顔を知っているので安心できる」と話す。

矢田智美(まこと)は、二〇〇九年に聖蹟ができた当初から家族三人で入居している。長男「真(まこと)」は三歳だった。「子育てをするならいろんな人と関わる環境が良い」と考えたからだ。

共有のリビングでは、自然と会話が生まれる。「一真はここで、年上の子どもや大人に交じってボードゲームをしたり、年下の子どもと遊んだりして育った。兄のように慕って、聖蹟を出て寮生活を送る中学生が帰省する時、うれしくてたまらない。人懐っこく、初対面の人も気が

後れせず話せる子になった。智美は「ここは大きな社会に出る前の小さな社会。小さい子どもがいる家庭は特に、助け合えることが多い」と語る。

それを強く感じたのが、東日本大震災だった。発生当日、智美は帰宅できず、夫も戻れたのは深夜になってからだった。他の居住者が保育園に「一真を迎えに行き、夜まで遊んでくれた。一真は「全然寂しくなかったよ」と振り返る。

この日の「モンミール」は単身で入居している川崎千恵子(こが)と一緒に座った。千恵子が「今度、一緒に上野にパンダを見に行こうよ」と一家を誘う。「じゃあ春休みがいいかな」と話に花が咲いた。

(敬称略)

婚難の中で

④「良い暮らし」へ自主運営



コレクティブハウス聖蹟の定例会で、採決の札を挙げる住人たち＝東京都多摩市で

コレクティブハウス
同じ屋根の下で

「では決めます。札を挙げていただきます」。進行役の女性が諮ると、全員、「賛成」の札を挙げた。「それでは、この件は承認されました。備品の洗濯物干しの購入を決めると、次の議題に移った。

一月中旬、コレクティブハウス聖蹟の共有リビングでは、月に一度の定例会が開かれていた。コレクティブハウスは住人が自主運営しているため、暮らしのあらゆることを定例会で議論し、決めている。この日は、会計報告から庭の整備の仕方、次年度の予算に関することまで議題は多岐にわたった。

共有リビングに五台ある大型テーブルの補修については時間を割いた。「お金がかかるが、口に頼むか」「自分たちで補修したら、何年くらい持つのか」。結論は出ず、次回に持ち越しに。午後一時からの定例会は約四時間続いた。

聖蹟の会則は「定例会の決議は、出席した組合員全員の合意を必要とする」と定めている。つまり、多数決では決まらず、全員が納得できるまでとことん話し合う。入居して約半年の川崎千恵子(こ)は「月に一回、長時間話し合うのは正直くたびれる。でも、大事なことから」と話す。

住人は、会計や住居内の美化、イベント担当など何かしらの係に就き、運営の一翼を担う。集合住宅では管理費を集め、管理人を雇うことも多いが、聖蹟では掃除や戸締まり、庭の草木の水やり、入居希望者の募集や見学対応なども全て自分たちでやっている。

聖蹟を企画し、運営を支援しているNPO法人「コレクティブハウジング社」(東京)の狩野三枝理事(み)は「面倒な事がたくさんあっても、暮らしを良くしていくという気持ちで他人と共有できる」と魅力を語る。

多様な世代の人が住んでいるが、狩野は「トラブルはほとんどない」と話す。「住人は、お互い違う考えを持った人間だと認識しながらも、やりとりする中で信頼関係を築いていく」。同社はこれまでに都内と群馬県で計五軒のコレクティブハウスを手掛けた。「今までの日本にはない暮らし方」に確かな可能性を感じる狩野は、もっと多くの町に増やしていきたいと考えている。

第8部おわり (敬称略)

シェアハウス「かぼちの馬車」破綻

入居者に混乱の恐れ

水道など停止も

首都圏で女性専用シェアハウス「かぼちの馬車」を運営する不動産会社スマートデイズ(東京)は九日、民事再生法の適用を東京地裁に申請し受理されたと発表しました。入居率の低迷が原因で、資金繰りが悪化した。管理する物件の一部で光熱費の支払いが滞っており、入居者に混乱が広がる恐れもある。今後は、物件所有者の大半に購入資金を融資した地方銀行のスルガ銀行の対応が焦点となりそうだ。

信用調査会社の帝国データバンクによると、スマートデイズは負債総額が今年三月末時点で約六十億円に上る。創業から五年余りで千棟近くの物件を建てたが今年一月に所有者への賃借料の支払いを停止するなど運営は既に破綻していた。

シェアハウスは台所など水回り設備が共用だが割安な家賃で住めるとして、主に求職中の若い女性が入居している。スマートデイズは経営破綻により「水道など生活インフラの確保が困難となる恐れがある」とため、物件の管理を変更するとしているが、立地が悪い物件で新たな管理会社を見つけるのは容易ではない。入居者の中国人留学生は「家賃をちゃんと払っているのに空調やシャワーが止まるなんてあり得ない」とし来月退去すると話した。

物件の所有者は約七百人で、会社員が多く地方在住者も含む。一億円以上を借りて購入したが、審査に使った書類の預金残高などをスマートデイズ側に改ざんされ、スルガ銀行にローンの支払い猶予や金利の引き下げを求めている。返済に窮すれば自己破産者が続出する恐れがある。スマートデイズはシェアハウス用の物件を一億円以上で販売し、その物件を所有者から借り上げて管理し、居住者から家賃を集めて毎月保証した賃借料を所有者に支払う事業を手掛けていた。